

---

# 死んでも死にきれない

深水晶

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

死んでも死にきれない

### 【Nコード】

N9017B

### 【作者名】

深水晶

### 【あらすじ】

二人称小説。困り者の友人に呼び出された『あなた』は「君は幽霊って奴を信じるか？」と尋ねられる。友人の見たという幽霊奇譚を聞かされる羽目になる『あなた』だったが、予想もつかない展開に……。以下の条件下で書いた小説のリライト版。(1) 恋人にフラれた主人公は旅に出る。旅先で一人の老婆に話を聞き、自殺を決定する。(2) 上記の話の流れを「二人称」で執筆。(3) 四百字詰原稿用紙十枚以内。

(前書き)

以前、Curious Vista Cup(和訳するとキテレツ杯?)のテーマ「二人称」用に書いてPC自サイトにUPした事のある小説のリライト版です。

<http://cvco.net/>

死んでも死にきれない

あなたはリアリストだ。不確かな事、非現実的な事は信じない。堅実で、リスクを決して犯さない。友人達には信頼されている。

今、あなたの目の前にいるのは、何かと問題のある友人だ。夢家で幾つもの職を転々とし、新事業を興しては失敗を繰り返している。性格にも難がある。困った友人だ。出来れば距離を置いておきたいタイプだ、と感じているが、彼はあなたを敬愛しているようだ。その無邪気な笑顔と奔放さに、いつもあなたは呆れ苦笑しながらも、見捨てられない。

彼はあなたとは正反対の人間だ。資産家の息子で、けれど決してそれを鼻に掛けない。いつも突拍子も無い事をして、君を驚かせる。

「君は幽霊って奴を信じるか？」

「おやおや、今度は幽霊らしい。あなたは

「ただの迷信だ」と答えた。

「君は相変わらずリアリストだな。いや、だからこそ俺は君を呼んだんだ。君ならばきつと真実を見抜いてくれると信じているからさ」彼は言った。

「買いかぶりだよ」

とあなたは答える。

「そんな事ないよ。俺はいつも君を尊敬してるんだ」

と彼はきらきらとした目で、心情を込めて言った。ストレートに賞賛されて、あなたは正直悪い気はしない。

彼は元々、饒舌だ。口数の少ないあなたには驚嘆ものだ。今夜の彼はとても上機嫌だ。いつも以上に舌が良く回る。心持ち顔も少し赤いようだ。

「酒でも飲んでいるのか？」

とあなたは聞く。

「アルコールは一滴も入ってないよ」  
と彼は答える。

彼は先日、数年付き合った恋人に振られたばかりだ。明るすぎる彼に、あなたは少し心配になる。

「大丈夫なのか？ …… 自棄<sup>やけ</sup>にはなっていないか？」  
あなたは尋ねた。

「心配性だな。今のところは正気だよ」

彼は笑う。あなたは、無理してるんじゃないだろうかと不安になる。

彼は時折無茶をする。酔っ払って服を着たまま川へ飛び込んで溺れかけたり、窓ガラスへ突っ込んで顔や頭を縫ったり、そういう話に事欠かない。不安がるあなたに彼は笑った。

「いや、梨花の事はもういいんだ。それよりも、俺の話を聞いてくれるかい？」

「勿論だ」

とあなたは答える。

「仕事を辞めたんだ」

と彼は言った。

「梨花の事で厭になったんだ。Yを呼び出して一緒に飲んでそうそう。君にも電話したけど繋がらなかったんだ」

Yというのは、二人の共通の友人だ。それを聞いてあなたは少しほっとし、やれやれ、と思う。彼と飲みに行くのは少々気が重い。

平日だろうが何だろうが彼はお構いなしだ。いつも朝まで飲み明かす。途中で帰る事は許さない。しかも彼はカラムシ上戸だ。

「その翌日、目覚めたのは昼の二時過ぎだったな。酷い気分だったよ。それで俺は気分直しに、出掛けようと思ったんだ」

彼は言った。彼は電車を次々乗り継いで、見知らぬ町へ辿り着いたらしい。木造の駅を出て、ぶらぶらと歩き、古びた大衆食堂へ入ったと言う。

「『いらっしやい』って出て来たのは、頭のつるりと禿げ上がった

オヤジさ。潤いなんか無い。そんなものを求めて入ったんじゃなく、腹の虫の音が収まれば良かったから、俺は仕方ないと諦めた。背に腹は代えられない。全くだ。背中で物は食えない。いや、腹からだって直接物は食えないけど」

と彼は言った。

あなたは溜息をついた。

「ことわざの用法が間違っているよ」と言う。

「細かい事は気にするな」

と彼は笑った。彼に取ったら何だって『細かい事』だ。

「まあ、ともかくだ。オヤジは『この時間だったらもう幕の内定食しか残ってない』と言ったんだ。俺は幕の内が売り残るってどういう事だっと思っただけど、賢明にも黙ってたんだな。ああ、そうとも沈黙は金って奴だ。キンで良いよな？ カネじゃなかったよな？

とにかく出されたそれが、また何とも言えない味で。いや、美味いんじゃないかって不味いつて意味で。ご飯は固くてぼそぼそしてるくせに妙に冷たくてしっとりしてて。焼き魚は普通の鮭の切り身だな。

スーパーでパックで売ってるような。ゴマ和えは、ほうれん草が茹ですぎ。大根と人参のなますも、甘ったるくてどろっとしていて酢も強い。しかも隣の鮭と、互いの匂いと味が混じり合って、何とも言えないハーモニーを

「いつまで続くんだ、この話は。そう思ったあなたは途中で彼の言葉を遮った。」

「そんな話もういいから。本題を話せよ」

彼は少し驚いたような顔をして

「それもそうだな」

と言った。だが、何か話したそうとして、あれ？という顔をする。

「何を話そうとしたんだっけ？」

あなたは呆れた。

「幽霊の話だろう？」

「ああ、そうだ。すまない。忘れっぽいんだ。また脱線しかけたら是非忠告してくれ。あまり時間がないんだ」

「約束でもあるのか？」

あなたは尋ねる。

「まあ、そうだ。そういうところだ。悪いけどそれまでにこの話は片付けるよ」

彼は少し淋しそうに笑って言った。

「君は本当に良い奴だな。本当、君と出会えて良かったよ。忙しい君を呼び立てて、本当にすまないと思っっている。君には迷惑かも知れないが」

彼の口振りにあなたは少し驚いた。

「随分殊勝な口振りだな」

とあなたは言った。

「いや、普段からそう思ってるよ。君になら話しても良いと思ったんだ。Ｙになんか話したら、一笑に伏される話をね」

そう言うのと、彼は何処か遠くを見つめた。

「そう。その食堂で食事をして、泊まる処がないという話をしたら、その民宿を紹介されたんだ。民宿にいたのは、しわくちゃのバアサンさ。もつとも、俺はそれが綺麗で妙齡の女性でも、すっかり疲れ果てていたから 先の不味い食事の所為だ。食事が不味いと気分が萎える とにかくさっさと寝たかった。バアサンは色々俺に話し掛けてきたが、面倒臭かったし疲れてたんで、ろくろく聞いてなかったんだな。とにかく部屋に案内されて、布団敷いてすぐ寝たんだ。……ああ、眠いな」

いかにも眠そうな顔で言った彼に、どきりとした。

「おいおい、話の途中で寝る気なのか？」

彼は曖昧に笑った。

「いや、まだ寝ないよ。すまない。とにかく布団に入ってすぐ寝た。身体が重くて、引き込まれるように眠って そのまま朝までって勢いだったが、何故か途中で目が覚めた。夢うつつのまま、ぼんや

りと目を開けると、目の前に女の髪があつた。ふさふさと豊かな、艶やかな黒髪。寝惚けてたから、これは良いかつらになるなって。本当見事で。それは濡れたように光っていたんだ。濡れ羽色の鴉つて奴」

「逆だろ。鴉の濡れ羽色だ」

あなたは訂正した。

「そう？ 君が言うならそうかな。いや、そうだろう。とにかくそんな色をしていた。本当に黒髪であんな綺麗なのは初めて見た。だから、女の顔が見たいな、と思って手を伸ばして、初めて気付いたんだ。その髪は確かに存在した。すぐ目の前にあつた。人の頭ほどの大きさで。だけど、何処を探しても顔がない。いや、ないのは顔だけじゃなくて。そう。もう判つたろう？ それは『髪』だけだつたんだ。俺は驚いたけど、目が覚めきつてなかつたから、まだ状況がいまいち掴めてない。どうして顔がないんだ？つてさぐつてたら、不意に耳元でけたたましい女の笑い声が聞こえてきた。慌てて髪から手を離して悲鳴上げたよ。その後はもう寝るところじゃなかつた。あんなに朝が待ち遠しかった事はない」

彼は一度口を切つた。

「ああ。長くなつてしまつたね」

彼は少し疲れた顔で言つた。何だか少し顔色が悪い気がする。

「平気なのか？」

あなたは尋ねた。

「大丈夫だ。それで一体何処まで話したっけ？」

そう言う彼の目線は何処か虚ろだ。まるで熱でもあるかのように、目が潤んでいる事にあなたは気付いた。

「本当に大丈夫なのか？」

あなたは心配になつた。

「単にひどく眠いだけさ」

彼は少し青い顔で苦笑いをした。

「翌朝、バアサンにその話をした。すると『それはたぶん私の娘で

す。娘は二十歳で入水自殺をして……』と言っただ。延々と聞かされて、もう良い加減嫌になって、なにげにバアサンの髪を見たら、ぞつとした。何故って、バアサンの髪は、髪の色と艶以外は、昨夜の髪と全く同じだったからさ。目の錯覚かも知れないが。急に恐くなって俺はその宿の支払いを済ませて逃げ帰ったんだ。ところがさ、それ以来毎晩、女の髪が俺の目の前に現れるのさ。幻覚かも知れない。ひよつとしたら取り憑かれてしまったのかも知れない。毎晩、現れては笑い声を残して消えるんだ。俺は恐くて、なのに何故かそれが現れるのを息を詰めて待っている。毎晩ね。そう。まるで、恋人の訪れを待つような心境でね。俺は……まともなつもりで、もう既に狂っているのかもしれない」

彼はくっくつと低く笑う。彼の顔は蒼白だ。ひどく病的な笑顔。あなたは思わずぶるりと震えた。彼の身体はいつの間にかガタガタと震えている。あなたはひどく厭な予感がする。彼は笑いながら言う。

「君はどう思う？ 君はどう感じる？ 俺が嘘を言っていると思うか？ 君の意見を聞かせて欲しいんだ。時間がもうあまりない……ほら、手なんかこんなに震えて。ああ……実は、君が来る直前に薬を飲んだんだ。ねえ、頼むよ。意識があるうちに君の返事をくれないか？ 正直もうあまり保ちそうにないんだよ。電話のコードはカットしてある。僕の携帯電話は電池切れ。君の携帯だが、実はさつき君がテーブル脇に置いた時、こっそりと隠したんだ」

そう言われ初めて、あなたは自分の携帯が無い事に気付いた。あなたは慌てる。そんなあなたに彼は穏やかな口調で言う。

「場所は後で言う。信じてくれ。それよりも君の考えを聞かせてくれないか？ ねえ」

何故、こんな事になったんだ。あなたは慌てる。彼は不思議そうな顔をする。

「何故口を開いてくれないんだい？ 早くしないと……時間切れになっってしまうよ。君も困るだろう？ なあ、君の意見を聞かせてく

死んでも死にきれない

れ。そうじゃないと、俺は死んでも死にきれない……」

ガクガクと震え、テーブル越しにあなたへと手を伸ばしてくる彼の腕から逃れるように、あなたは身を逸らし避けた。

どうしたら良い？ あなたの脳裏の中で、ぐるぐると思考が渦巻いている。目の前の彼の顔はもう土気色だ。残された時間はそう長くはないだろう。

The End .

(後書き)

ちよっぴり昭和風味な短編ホラー。ものすごく怖いという話ではないけど、夜に一人で読んだらじわじわと恐くなる、そういう話が書きたいな、と思って書いた物語です。

二人称テーマで書いたものです。

とりあえず二人称の醍醐味は、読み手を引き込み、物語に干渉させる事だと思うのですが。

成功しているかどうかは少々謎です。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9017b/>

---

死んでも死にきれない

2008年11月7日09時20分発行